

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°12 ピエール＝オリヴィエ・ボノーム

生産地方：ロワール

新着ワイン 4 種類♪

VdF メリエ 2018 (白)

今回初リリースとなるメリエ！メリエ・サン・フランソワはロワール・エ・シェール県では希少品種で、過去にティエリ・ピュズラ、カプリアードがその酸度を活かしペティアンの補助品種として使用していたくらいで、100%スティルワインはほとんど見かけることがない！ボノーム曰く、本来収量の取れる品種だが、ヴィエーユ・ヴィーニュのため収量が制限され、よりワインのポテンシャルに期待ができるためチャレンジしたそうだ。ちなみに、メリエ・サン・フランソワは Chenin Blanc と Gouais Blanc を掛け合わせた品種で特徴的にはムニユピノに似ているとのこと。主にアルマニャックのブドウ品種として認知されているようだ。

VdF ロルモー・デ・ドゥ・クロワ 2018 (白)

2017 年は春の遅霜の被害により全滅…。2 年ぶりのリリースとなるロルモー・デ・ドゥ・クロワ。2018 年は久々に収量に恵まれた当たり年。収穫したブドウも傷ひとつなく完璧だった。一方、醸造面では発酵がなかなか終わらず、終盤で少し残糖がある状態で発酵が止まってしまった。その後も再発酵を待ったが、酵母の動く気配がなかったため、最終的に 4g/L の糖を残したまま目の細かいフィルターをかけ瓶詰めした。出来上がったワインは、口に入れた途端やさしい甘味に包まれた白い果実のリッチな旨味エキ스가広がり、後からキュッキュと口の中で音がしそうなくらいチョーキーで緻密なミネラルが骨格を支える！完全辛口であれば鉱物感が硬く強すぎたかもしれないが少量の残糖によりうまく緩和され、結果的に絶妙なバランスを演出している！

VdF トゥーレーヌ ラ・テニエール 2018 (白)

2018 年はブドウが早熟で収量に恵まれた年。ボノーム曰く、収穫はブドウが熟しすぎないように 2017 年と同じ 9 月 19 日前後（例年よりも 3 週間早い）を予定していたが、9 月 15 日の時点ですでにブドウの潜在アルコール度数が 14%を超えていたため、急遽翌日の 16 日に収穫に取り掛かったとのこと。ちなみに今回は、自社畑のシュナンをロルモー・デ・ドゥ・クロワに全て回し、代わりにフランソワ・サン＝レジェールのシュナンをラ・テニエールに使っている。醸造面では、酵母に勢いがなく、完全に発酵を終わらせるのに 8 ヶ月を要した。また、発酵終了後は味わいがドライでアルコールが立ちすぎていたので、角を落とし味わいをしなやかにするためにさらに 10 ヶ月樽熟成に時間を使った。結果、ワインはヴィヴィッドな勢いと味わいのハーモニーが同居する、力強く飲みごたえのある逸品に仕上がった！熟成に耐えるポテンシャルがあり、また味わいが濃くメリハリがしっかりとあるので、クリームやバターを使用するこってりとした料理との相性が良さそうだ！

VdF ヴァンクүүл・ヴァンキュ・ルージュ 2019 (赤)

2019 年は日照りの影響により収量が少なく、しかもガメイが完熟しすぎてアルコール度数が 15%を超えてしまった。幸い、カベルネフランが潜在アルコール度数 12%と低かったため、アッサンブラージュすることでアルコールのボリュームをいくぶん緩和させることができた。ボノーム曰く、2019 年はガメイとカベルネフランの相性が良く、最終的にアルコール度数が 14%と高止まりでも味わいは柔らかくジューシーに仕上がったとのこと！確かに、ワインを口に含むと濃厚な果実の凝縮味が広がるが、アルコールのボリューム感はそれほどなく、しなやかな果実味が優しく溶けていくような感触がたまらなくクセになる！飲み口が柔らかいのでスルスル行けてしまう！

ミレジム情報 当主オリヴィエ・ボノームのコメント

2018 年は、ミルデューの猛威がありガメイやピノなど一部被害に遭ったが、白は総じて品質・収量に恵まれた当たり年だった。冬は暖冬で春の芽吹きは早かった。開花は順調。6 月から天候が崩れミルデューの猛威にあうが、それ以上にブドウの房が多かったため、大きく収量が落ちることはなかった。7 月の終わってから乾燥した天気が続く。一時水不足が心配されたが、結局冬と春に降った雨のストックがあったおかげで辛うじて難を逃れることができた。収穫日は例年よりも 2~3 週間早い。収穫したブドウはきれいだったが全体的にリンゴ酸が少なく、発酵の際ボラティルの上昇に注意が必要だった。

2019 年は、歴史的な猛暑と日照りに見舞われた年。冬は適度に雨が降り寒さもあったが、気温がマイナスまで下がることはなかった。4 月に入り、初旬と中旬の 2 回に渡り寒波が降りた。シュヴェルニーやシェール川一帯など広範囲に渡り遅霜の被害があったが、まだブドウの芽が出始めだったこともあり、被害は最小限で済んだ。ただ、この 4 月の寒波の影響により、ブドウの成長サイクルはいったん大きく遅れをとってしまった。開花は 6 月中旬と前年よりも 3 週間遅かった。春は適度に雨量があったのだが、6 月中旬から雨がぱたりと止み日照りが 10 月終わりまで続いた。また、6 月と 7 月の終わりには日中の気温が 40℃を超す歴史的な猛暑に見舞われた。この猛暑で一部の畑はブドウ焼けの被害に遭い、極度の水不足に陥りブドウの成長も途中から夏バテによりブレーキがかかった。収穫したブドウはどれもアルコール度数は高かったが、途中成長が止まったことでしっかりと酸が残った。

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き



写真① 病気なく完璧な状態のソーヴィニヨンブラン

今年は豊作の年と言われているロワール地方。実際ボノームの畑の状態はどうか？ボノームと一緒に確認しに行った。これはソーヴィニヨンの畑の写真。(写真①) 確かに房がたくさん付いている！同じシュヴェルニー地区でも、ヴェイユと比べるとブドウがきれいで病気がほとんどない。ボノーム自身も、7 月中旬から急にオイディオムの被害に遭ったという生産者の声を多く聞くようになったが、彼のところは砂地のシュヴェルニー用のピノノワールが少し被害を受けたくらいで、他の畑はほとんど問題ないようだ。「通常ロワールでブドウの病気と言えばミルデューなのだが、今年はほとんど見当たらない。ミルデューは高温多湿が繁殖の条件に対し、オイディオムは低温で少しでも湿度があればすぐに繁殖する。今年は例年よりも乾燥していて湿度は高くないが、夜と日中の気温差が激しく、この寒暖の差がオイディオムの繁殖を助長している。特に砂地土壌の畑は粘土質の土壌よりも朝靄が出やすく、朝の気温が低い時にブドウに付いた朝露がオイディオムを誘発し被害を広げている。その点、このソーヴィニヨンの畑は粘土質なので昼夜の寒暖差があっても朝露がほとんどない」と、彼はオイディオムの要因を分かりやすく説明してくれた。

これは雹に当たったソーヴィニヨンの写真。(写真②) これはどうやら 7 月 10 日に通り雨のように局地的に降った雨が一部雹となりブドウにインパクトを与えたようだ。ボノームが言うには、被害というほどのものではなく、逆にその時に降った雨のおかげで、写真①のような実の大きなブドウが猛暑の中健全に維持されているとのこと。



写真② 雹の被害は軽症のよう



写真③ 年々深刻になるエスカの被害

それよりも彼が心配なのは、この写真のようなブドウの樹の病気。(写真③) これはエスカ (Esca) と呼ばれるブドウの成長期に寄生菌が樹に繁殖し根を腐らせてしまう現代のフィロキセラとも言われる病気だ。このエスカはブドウの剪定の時にハサミに付いた寄生菌が切り口から侵入し感染するのが一般的で、通常エスカにかかったブドウの樹は速やかに根こそぎ伐根し、剪定ハサミも触れないよう細心の注意を払うのだが、それでも毎年このような感染が見られるようだ。ちなみに、奥の植樹は、以前エスカにかかり伐根したブドウの木を植え替えたものだ。当時、実際に感染した木は1株だけで、そのまわりの健全な樹も抜いて万全の対処を行ったのだが、今年またすぐ隣にエスカが出てしまったとのこと。「こ

の樹を伐根する時にまたこの植樹したばかりの苗木をいくつか抜かなくてはならない…」と彼はため息をこぼしていた。この30アールのソーヴィニヨンの畑だけでも、ざっと見わたすとエスカに感染した木を7~8本確認できた。全体の数としては少ないが、でも確かに毎年このペースで感染が広がったら、深刻なのは間違いない！(昔はエスカに効く農薬として arsenite de sodium という劇薬が使用されていたのだが、2000年代に禁止されて以来今のところ特効薬はなく、唯一の方法が伐根となっている)

(2020.7.17.ドメーヌ突撃訪問より)

※弊社HP「フォト・ギャラリー」より、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ